



鶴からの手紙

真鶴中学校だより 第二十二号

2020.1.10
責任者
平田 渉

新年にあたり

あけましておめでとうございます。日頃より本校の教育活動に、ご理解・ご協力いただきありがとうございます。新年を迎え、三学期のスタートにあたり、始業式で次のような話をしました。

「新年について」

新しい年を迎えるにあたり、どのような一年にしたいかということを考えてみようか。時間の流れから言えば、十二月三十一日から一月一日に日付が変わっただけだが、私たちはそこに意味を持たせ、今までの自分から新しい自分を創り出すきっかけとするのが正月ではないかと考えられる。「一年の計は元旦にあり」というが、今からでも遅くない。去年の自分と決別して、新しい自分像を作ってみよう。

「それぞれの学年に向けて」

三年生は卒業式まであと二か月。進路が決まる大きな山場が来る。言われなくてもわかっているだろうし、耳にタコができるほど言われていることかもしれない。一生を左右する

大事な時間をかみしめながら過ごしてほしい。

二年生は三か月後に義務教育最終学年の中学三年生になる。最上級生としての君たちの振る舞いが小学校一年生まで影響することを自覚してほしい。

一年生は三か月後に四十人の後輩を迎え入れることになる。君たちが先輩にしてもらって助かったことを下級生たちにお返しする番だ。新入生の戸惑いをもっとも身近に考えられる一年生に期待している。新入生は誰でも大きな不安をかかえて入学してくる。一、二年生の果たす役割は、自分たちも含めて、誰にとっても居心地の良い学校にすることである。

「『ともに生きる社会かながわ憲章』について」

平成二十八年七月に相模原市の障がい者支援施設で大変痛ましい事件があった。この事件を通して神奈川県は「ともに生きる社会かながわ憲章」を制定した。その内容は

一 私たちは、あたたかい心をもって、すべての人のいのちを大切にします

一 私たちは、誰もがその人らしく暮らすことのできる地域社会を実現します

一 私たちは、障がい者の社会への参加を妨げるあらゆる壁、いかなる偏見や差別も排除します

一 私たちは、この憲章の実現に向けて、県民総ぐるみで取り組みます

ここでいう「私たち」とは皆さんも含めたものであることは言うまでもない。障がいのある・ないにかかわらずすべての人が尊重される学校、社会づくりに取り組むことは私たちの義務であることを強く覚えてほしい。

誰が言ったかわからないが「一月は行く、二月は逃げる、三月は去る」という言葉がある。それだけこれからの三か月はいつも以上に時間が短く感じられる時期でもある。

時間は全ての人に平等にある。何もしないで時間を使うも、計画的に限られた時間を使うも自分次第。三か月が過ぎ去った三月に後悔しない使い方をしたいものだ。

本年もどうぞよろしくお願ひします。

三学期に向けて

三年

私たち三年生は、四月に比べてたくさん成長しています。特に教えあいや班活動がよくなっています。教えあいで、早く終わった人が自分から声をかけてみんなで「分かる」ようになっていくところ、班活動では、

みんなが考え、「気づき」を大事にしているところ。一方で、授業中の反応やONとOFFの切り替えなど、改善すべき点もあります。クラスや学年全体で意識したり、全員で気づけるようにすることが大切だと思います。

二年

二学期の大きな行事である学習活動発表会の合唱では、クラス全体で明るく楽しく元気よく笑顔で練習することができ、本番でもみんなが気持ちよく歌うことができました。日常生活ではマナログの家庭学習欄の記入、ホワイトボードの活用など家庭学習や忘れ物をなくす意識を高め、そのことでクラスがよりよくなったと感じています。

一年

二学期の生活面において、教科の忘れ物や物をなくしてしまうことが多かったのでマナログを活用するなどして改善していくことが必要だと思っています。学習面でも提出物を必ず出せるようにマナログを記入し活用していくことが必要だと思っています。

三学期に向けて、一人ひとりが目標を考え、よいところを伸ばし、課題は克服できるようにしていきたいです。学年全体の課題についてもみんなが協力して行きたいと思っています。